

# 生存科学研究ニュース

Vol. 33, No.3 2018.10 発行

発行 公益財団法人 生存科学研究所

〒104-0061 東京都中央区銀座 4-5-1

tel: 03-3563-3518 fax: 03-3567-3608 email: office@seizon.or.jp http://seizon.umin.jp

生存科学研究所会員と人口ピラミッド

常務理事 津谷 喜一郎

わたしは 1990-91 年の武見フェローである。当時は生存科学研究所が日本側の窓口で、銀座の事務所で面接試験を受けた。帰国後数年たち 1995 年に初めて常務理事の一人となった。その折には特に何かの役を任じられた覚えはなく 1 年で終わった。その後、2007 年に再び常務理事となり、この「生存科学研究ニュース」を含めて広報を担当してから 11 年経過した。

これまで自主研究として「東西の健康観・医・薬」「銀座ナイトセミナー『生きる』」「代替医療と国民医療費」「代替医療と倫理」「元気と病気の間」「代替医療と語り」などのプロジェクトを実施させていただいた。そのうち一部は出版助成も受け、本年 6 月に『医療にみる伝統と近代 - 生きている伝統医学』として発行することもできた。ありがたいことだ。

この研究所は公益財団法人としての「会員」をもつ。[定款](#)をみると「賛助会員」が正式の名称だ。生存研に合合で来るときに、会員は一体何人だろうと思ったことが何度かあった。それぞれのプロジェクトの活動はこのニュースや「生存科学」誌で見るだけで、プロジェクト間で人のつながりが始まることはなかった。

昨 2017 年から事務局長が小丹恵子さんに交代し、それを機会に、名簿があったほうがよいだろうと考え、同じ常務理事の小林芳子さんから協力を得て [filemaker](#) で管理されているデータから作成し常務理事会で配布した。わたしも初めてなら、他の常務理事も初めて見た人が多い。

本 2018 年 7 月時点での会員数は 131 名だ。学会のように会費が財務の基本で、役員人事もそれを基になされる組織では会員名簿は重要な意味を持つが、生存研はそれとは異なるため、これまであまり関心をもたれなかったようだ。しかし、わたしには、このような方がおられたのかと興味深いものである。常務理事会では名簿の送付は個人情報保護もあり十分注意してとのことだ。

これを見て、過去に 2 回、人口ピラミッドを作成したことを思い出した。まず、医家芸術クラブである。1957 年に設立され、歴代会長には、式場隆三郎、東竜太郎、大石武一など錚々たる方が含まれる。4 年に一度の日本医学会総会開催時には、柔道、囲碁、アマチュア無線などと共に、ソーシャルイベントを開催している。

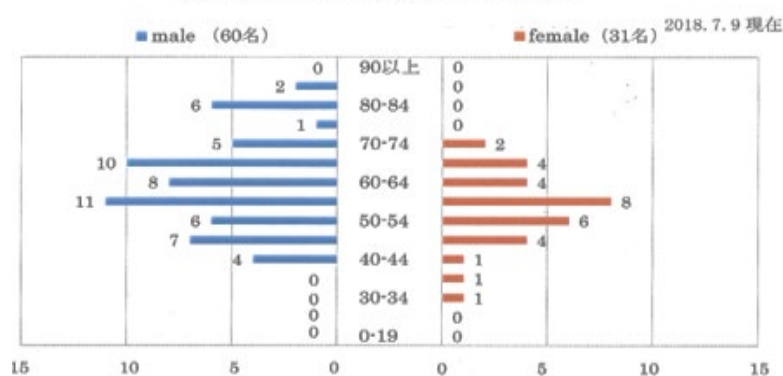
しかし会員が減少、高齢化、財務状況が悪くなり、そろそろ解散だということになり 2008 年の総会で議論された。一方、存続を望むものもあり、私を含めて 3 人で「再生委員会」を立ち上げて継続することになった。その時にクラブの現状を把握するために人口ピラミッドを作成し [「医家芸術」誌に掲載](#)した。それもあってか現在も活動を続けている。これを見ると 80-84 歳がピークで、95 歳の方がおられた。

もう一つは日本薬史学会だ。こちらも 1954 年設立と古い。初代の会長は朝比奈泰彦だ。わたしは 2012 年に第 6 代の会長になった。こちらは財政的にはそれほど危機的ではなかったが、人口ピラミッドを作成し [「薬史レター」に掲載](#)した。これで見ると医家芸術クラブよりいくらか若くピークは 60-64 歳、だがよく見ると 2 峰性で次のピークは 75-79 歳だ。

下記に示したのが生存研のものだ。会員 131 人の内、生年月日が判明しているものが 91 人 (67%) で、性別は氏名から判別した。メールアドレス保持者は 85 人 (65%) だ。読者はどう感じられるであろうか。

なお今号からアンダーラインの箇所は [hyperlink](#) とした。生存研 [website](#) の生存研ニュースの [pdf](#) 版で読める。

生存科学研究所会員人口ピラミッド



「森・その地域社会、生活文化、  
精神世界における役割の再生的研究」会  
研究責任者 藤原 成一

本研究会の第2回は、清水美香先生（京都大学森里海連環学教育研究ユニット准教授）の意欲的なアイディアと周到な計画、準備によって、研究会の主旨と共振しつつ更に重要なテーマとの協働に向けての大きな前進となりました。研究会は9月8日(土)、9日(日)の両日にわたって行われ、8日は京都大学芦生研究林（京都府南丹市美山町）でのフィールド体験と徳地直子先生（京都大学フィールド科学教育研究センター副センター長、上賀茂試験地長、教授）による森林学レクチャー、並びに清水先生、同研究林研究員の方々による森林案内。翌9日は「コモンズとしての森とレジリエンス」のタイトルのもと、日置道隆師（金剛寶山輪王寺住職、森の防潮堤協会理事長）、徳地先生、清水先生、藤原成一の4名によるフォーラムです。

初日8日、4日前には関西を豪雨暴風が襲い、更に当日の未明3~4時には研究林の所在地南丹市に1時間に100ミリを越す豪雨がありました。朝10時過ぎ山陰本線園部駅集合、徳地先生の車と研究林の車に分乗し、1時間余り、山間集落を通過して研究林着。雨の中、徳地先生と研究員の方々に導かれて森林へ。充実した森林資料館見学など、研究会メンバー各々が、森の気を心身に浸み込ませる新鮮な体験でした。

2日目は、本研究会のメイン「コモンズとしての森とレジリエンス」フォーラムが、京都大学森里海連環学教育ユニット、京都大学レジリエント社会創造研究会、生存科学研究所の共催、京都大学研究大学強化促進事業「百家争鳴プログラム」の協力のもとに、西陣産業創造会館内の「インパクトハブ京都」で行われました。主旨は「身近な存在であるべき森を通して、人と自然と社会との関係を捉え直し、自分自身やコミュニティの『レジリエンス』（変化する力、柔軟な器量）を共に再掘し、人間社会と自然との共生のあり方を創造的に考えたい」というものです。森という自然を媒介として、レジリエンスの力によって、コモンズの回復、コミュニティの再生の道を探ろうというのです。

総合司会の清水先生から、フォーラムの主旨説明に続き、レジリエントとは何か、懇切な講義です。レジリエンスとは「状況変化を重視し、短・中・長期的な視点から社会に散在する点を線で結び、木を見て森も見ながら、予測しないことが起きて、逆境にあっても折れない環境を生み出すこと」で、自然システムと社会システムを媒介し、それらの関係を相互協働的に創出していく機能を持つものです。レジリエンスを創り出し機能させるに

は、少なくともリンケージ、プロセス、時間、スケールという4つの視角からのアプローチが必要で、状況を正しく把握し適切に対応するには、レジリエンスの力を自覚した個人やコミュニティの協働が求められます。分野や組織、立場や能力の違いを横断し相互に協働するところに、協働知としてのレジリエンスが生まれます。その観点と姿勢から清水先生は東日本大震災の復興活動の中で、コンクリートの防潮堤に抗する森の防潮堤の実践に出会い、更に「千年希望の丘」づくりに出会います。自然の理法に則ったその運動に関西の方々にも知って欲しい、それも本フォーラムの狙いです。

それを受けて、日置道隆師の「千年希望の丘づくりの思想と方法」について、指導的実践者ならではの熱のこもった講演です。大震災の直後、宮脇昭横浜国大名誉教授からコンクリートの無機質で暴力的な防潮堤で沿岸が封じられることを憂慮する電話が入ります。すかさず教授と共に沿岸の被災状況調査をし、コンクリートに変わる森の防潮堤づくりへと、国や自治体の無理解・反対に抗しながら、奔走します。宮脇植物生態学の理論に基づく構想で、そこには自然と人間社会を協働させる哲学がありました。宮脇教授からの学びと協働はそれ以前、平成15年、輪王寺の参道の杉並木430本が仙台市のトンネル工事により伐採され、その後どう復旧するかというところから始まります。以後、宮脇生態学は「本物の森」づくりの根幹哲学となり、輪王寺植樹祭が実施され、年を重ね「いのちの森」づくりへと生長していきます。平成16年から5年間で62種32,000本植樹し、更に寺域から広域へ、岩沼市の協力を得て、「千年希望の丘」構想へと発展していきます。自寺の森づくりから「千年希望の丘」、そして「森の防潮堤」づくりへと伸展してゆく根底には「いのちを守る」という慈悲の哲学と、千年の未来を見守るレジリエンス思想があります。

続いて、藤原が「歴史にみる人・自然・社会の協働：レジリエンス」の表題で、コモンズとしての森を壊すもの・つくるものは何か、森の再生にはどのような姿勢と思想が必要か、京都を例に論じました。人間の生存環境と自然環境とは古来、山一野一里という関係にあり、山は神々や祖霊の在す非日常の聖地、里は日常を営む俗地、野は山と里の境界にあつて非聖非俗地、かつ双方の触れ合う聖俗融和地です。そこは森や雑木林の地で入会地として共有され、里の住民の聖なるコミュニティの場、コモンズでした。しかし、京都は嵯峨野や北野など七野、八野を有しながら、遷都時からコモンズとしての森は育ちませんでした。王侯貴族が自邸を囲って庭園を造り、都城内から共同の森を追放し、更に野に別荘を営み、人工林の庭園としてしまったからです。日本人の自然との

付き合いは、①自然への参加、②自然の取り込みの2種ですが、②が主流とされ、庭園文化が森林文化を駆逐したのです。その姿勢は現代まで続き、東山山麓は別荘で占拠され、不入地となってしまいました。そういう自閉的人工自然を解体し、本来の野、コモングの森へと新生させるには、人間の心性と姿勢の改革、自然との付き合い方の修正しかありません。庭園の樹々同様、剪定され様式化されてしまった感性に野生の感性を注入し、庭園同様、栽培されパターン化された思考を断ち切り、思考の野生を取り戻すしかありません。自然の取り込みでなく自然への参入です。人間までもが剪定され栽培されてしまった今、感性の野生、思考の野生が、協働し合うレジリエンスを通して、自然との共生を生む。そのためには庭園のように自らを閉じず、コミュニティを、社会を、「開く」こと、そこに相互協働が約束されると結びました。

締めは、徳地先生です。京大フィールド科学教育研究センターの森林ステーション、芦生研究林がどういう研究・実践をしているところか、森林内生物生態、森林の育成や管理、森林の自然学習や環境科学実習など、研究林の多岐にわたる活動と森の持つ面白さを、実地の研究者・指導者ならではの具体例を挙げながらの講義です。芦生研究林は京都市から北東に約 35 km、福井県と滋賀県に接するところ、由良川の源流域に位置します。広さは約 4200ha、気候は日本海型と太平洋型の移行帯にあって変化に富み、植生も暖温帯林から冷温帯林の移行帯にあって種類は多く、植物を観察し学ぶ上でうってつけの研究林です。標高の低いところから 900mを越すところまで、北面南面など各傾斜地に特有の植生があり、しかも天然林と二次林と人工林が交錯し、比較観察・研究にも最適の山林です。植生の豊かさはまた多様な動物の棲息も可能とし、貴重種として多くの生物が記録されています。植生や動物相の豊かさを背景に、森林研究は積み重ねられ、森林の利用も歴史の動向に従い、あるいは抗しつづ進められてきました。近年、官民共に森林への関心が薄れるなか、芦生研究林は従来の研究実績の上に、森林利用学習や生態科学学習、緑地環境科学学習、森里海連環学実習など多様な研究と実習と教育に力を注いでいます。森は生物多様性の宝庫であり培養保全地です。森は本来コモングです。森の持つ大きな潜在力を再生するためにも、森林を知ることは必須です。無機質化して行く都市人工砂漠の中に緑のオアシス空間を創り出す。そういうことへと誘導される講話でした。

続いて、会場から、レジリエンスという協働知への共感、千年希望の丘づくり計画への感銘、研究林の幅広い活動への敬服、森の魅力の再発見など、次々と質問や意見が出され、参加者約 40 名各々が課題を見出した感じ

で盛況裡にフォーラムを閉じました。京大の新しい研究分野と生存研の自主研究との対論という学術交流の創出を感じとった研究会でした。

少子高齢化時代の都市型災害対策 ; Health・Coexistence・Well-being を意識した社会基盤システムの検討

研究責任者 坪内 暁子

第1回研究会を、2018年9月30日(日)成城中・高等学校において開催した。

当研究会は、2016年度に実施した成城学校避難所地域に向けた調査結果をもとに、2017年度からは、特に、高齢者、慢性疾患患者、障害者等要援護者支援を中心に対策作りを進めている。

同避難所の成城学校は、創立130年を経過した私立中高一貫男子校であるが、少子高齢化による公立校廃校という地域の事情で、私立校でありながら、新宿区と地域からの要請により、1996年に防災覚書によって公立校避難所相当の地域住民のための指定避難所となった。しかし、公立校と異なり、私立校は外国人対応も担当する生活文化局管轄であり、しかも、区の危機管理課が担当する指定避難所になってしまったため、指導的にも予算的にも宙ぶらりんの状況にある。

地理的には、同避難所は乗降客数が全国1位の新宿駅からわずか3キロの地域に位置し、新宿区によると災害時の総合評価は5段階で3-4である。その理由として、細く坂の多い道と、建物の老朽化、地域住民の高齢化といった特徴が考えられ、建物倒壊や火災、さらに避難時のリスクの高い地域である。



調査結果によれば、地域住民の回答約 1,270 人のうち 9 割が同避難所に避難すると回答しているが、受入数は 500 人、体育館と二つの地下の武道場のみの利用となる。

例えば、感染症のリスクの高い慢性疾患患者・高齢者・妊婦等の、本来教室などの個室対応が望ましい「ハイリスク層には適していない避難所」と言えなくもない。

以上の背景を踏まえて、今回、我々は、研究班メンバーに加えて、同避難所運営に関わる地域の方々をお呼びし、同避難所防災訓練の日程に合わせて、第1回定例会を開催した。1)要援護者支援、2)ペット同行避難、3)生徒・教職員に向けた防災教育の3つの課題グループを編成し、地域の方々に各課題テーブルを回っていただく形式で、異なる視点からの意見も吸い上げるスタイルで、

各課題の問題点や具体的な被害低減にむけた仕組みなどについて討議した。

どの課題でも、連携体制の構築や「共助」に繋がる仕組みの必要性の声、会議のまとめとして挙げた。地域連携、行政との連携、医療機関、薬局や獣医師会との連携、企業や研究者との連携、私立校連携、公立校避難所との連携などを意識して、引き続き対策作りを進める。

なお、地域連携や学校連携に向けた取り組みとして、定例会前に実施した防災訓練では、ペット同行避難コーナー開設、防災訓練啓発作品コンクール、成城体操部によるマッスル・ミュージカルの演技なども取込み、「共助」に繋がる顔の見える関係作りを昨年度から行っている。

### 環境予防医学包括制御研究会

研究責任者 大槻 剛巳

環境予防医学包括制御研究会では10月20日(土)、生存科学研究所会議室にてセミナーを開催した。講師は、研究会メンバーでもある千葉大学予防医学センターの森千里教授、そして北里大学との交流に関して来日されていたイタリア、ChietiのUniversity "G. d'Annunzio" of Chieti-PescaraのMario Di Gioacchino教授。

森先生には、化学物質の次世代(次々世代)影響について、猛烈な勢いで研究を進められているお仕事の中で、最先端のエピジェネティクス、そしてマイクロバイームなどの最新知見をお話し頂き、その研究の量と質に圧倒されつつ、最終的に人々の暮らしに貢献するところまでのストラテジーの深さにも感動を覚えました。

また、Di Gioacchino教授からは、金属とナノ材料による生体影響について、こちらも膨大な量のデータの紹介となり、なかなかすべてをフォローし切れなかったのですが、免疫系にも着目して多くの成果を挙げていらっしゃるのと共に、討論の中では、今後の展開あるいは実際の職業現場や環境からの生体への影響について、どのように対応すべきであろうかといった点についても、集まった本研究会のメンバー、さらにお声掛けさせて頂いてご参集頂いた先生方の中からもいろんな意見が出され、充実した会になりました。



土曜日の午後後半からのセミナーにも関わらず講師お二人を含めて15名のご参加を頂きましたし、青木理事

長にも加わって頂き、国際的な環境医学として、今後、見極めていかなければならない課題が明らかになったと共に、3世代に渡る環境中物質の影響も視野に入れながらも、本当に目に見えないナノサイズの物質からの生体影響についても考慮していかなければならない現況が改めて認識される研究会した。

今後も、環境予防医学研究、そしてその制御を実社会の中で如何に構築するかを目指して、検討を深めていきたいと思っております。

### 「生存科学叢書」新行

松下正明、齋藤正彦編著

2018年4月、日本評論社より「生存科学叢書」一般専門書2冊が刊行され、9月に、松下正明、齋藤正彦編著『認知症医療・ケアのフロンティア』の研究専門書が刊行されました。

年々増加している認知症の人を地域で支える医療・介護サービス、社会活動の場づくり、安全を守る法の整備など、現実ニーズの高い認知症の人への社会心理的対応を具体的に論じた最新の論文集です。



### 研究会等日報

- 9月27日(木) 対人支援職者の倫理的行動と倫理観の構造研究会
- 9月30日(日) 少子高齢化時代の都市型災害対策；Health・Coexistence・Well-beingを意識した社会基盤システムの検討
- 10月2日(火) 健康価値創造 e-book 出版検討会
- 10月3日(水) 第7回みらいエンパワメントカフェ
- 10月20日(土) 環境予防医学包括制御研究会
- 10月28日(日) 体験型医療事故初期対応実地研修会
- 10月30日(火)、11月1日(木)、2日(金)、8日(木) 自主研究ヒアリング
- 11月9日(金) 第8回みらいエンパワメントカフェ
- 11月21日(木) 第4回常務理事会
- 12月14日(金) 第9回みらいエンパワメントカフェ
- 12月15日(土) 第6回生存科学シンポジウム

### 事務局より

- ★ 2019年度自主研究・助成研究の募集を開始しました。当研究所ホームページに申請書等を掲示しています。  
なお、不明点等ありましたら事務局にお問合せ下さい。  
募集期間：10月1日(月)から11月19日(月)まで
- ★ 第6回生存科学シンポジウムを2018年12月15日(土)上智大学四谷キャンパス6号館402室で開催します。  
会員の皆様参加をお待ちしております。